

問題 一 『日本人と神』佐藤弘（講談社現代新書）

問一	問二	問三	問四	問五
ア 円滑 イ 偶然 ウ 緊張 エ 握 オ 隔	中世ヨーロッパや前近代の日本では、人を超えた目に見えない異質な他者の存在を実感し共有する目的で、神仏や死者のための施設を公共空間の中心部に設置していたこと。	集団同士の対立が極限まで昂まると、超越的存在に委ねる以外の方法では、人が人を裁定する罪悪感や、罰した側に向けられる怨念の循環を断ち切れないから。	深山や未開の野は神の支配領域であるという認識を背景とする、狩りに対する儀式とタブー。	死者や神仏などの超越的で異質な存在を共有していた前近代社会が、人間中心主義の社会に移行し、人物間、集団間、国家間の緩衝材を喪失することによって、感情的な軋轢や利害の対立を宿命とする人間同士が直に対峙せざるを得なくなったことを意味する。

（参考文字数）

（78字）

（72字）

（38字）

（117字）

問題 二 「杏子」(『杏子・妻隠』所収 新潮文庫) 古井由吉

問一	毎日同じことを羞かしげもなく厳密に繰り返し、病気の杏子には嫌悪しか感じられない姉のこと。
問二	彼と一緒に食べるように姉に振舞われたケーキと紅茶は、食べ方の癖を他人に見られたくない杏子にとって、屈辱的なものと彼には感じられたから。
問三	お互いの癖のことを認め合って、その癖の反復を気味悪がったりしなくなる位、一緒に暮らせばいいということ。
問四	食べ方の癖はどんなに嫌悪を覚えたとしても、生きるために不可欠な反復であり、逃れられない行為だということ。
問五	病気であることで、健康な人が無自覚に反復している癖に対し、羞恥と嫌悪を感じていたが、彼と食事をし、互いの食べ方の癖を認め合うことで、彼との生活に対して前向きになったから。

(参考文字数)

(46字)

(67字)

(51字)

(52字)

(85字)

問題 三 『大和物語』 作者未詳

問一	ア	イ	ウ	エ
	きつと国も破滅してしまうだろう	ご準備をお整え申し上げて	どのようにお聞きになったのだろうか	どうしてそうやって伺候しているのか
問二	<p>度重なる石山寺への御幸で、近江の国に負担がかかっていると、近江の国守が、こぼしているのをお聞きになり、入用の物を他の荘園などから都合を付けようとお考えになったから。</p>			
問四	<p>御幸に対する陰口をお聞きになった帝の心中を察すると、畏れかしくまって、このまま還幸させることもできず、歓迎の誠意を披歴する必要があるから。</p>			
問五	<p>ささ波は絶えず湖岸を洗い清めているようではいけません。「なぎさが美しいとお思いましたら、亭子の帝よ、お泊りください」とでもお願い申し上げるつもりなのでしようか。</p>			

(参考文字数)

(82字)

(70字)

(79字)

問題 四

『剡溪漫筆』^{せんけい}

孫能伝

問一	ア	よつて	イ	つひに	ウ	より	エ	ゆるに
問二	どうして、私が一夜の飢えに堪えられず、臣下に、際限のない殺生を教化することができようか、いやできない。							
問三	仁宗が、のどの渴きを癒そうとしたときに、湯茶係が見当たらなかったことを問い質してしまつたら、湯茶係が役目を怠つていたとして、罪に問わなければならないということ。							
問四	きかつすらなほしのぶべく、いはんやそのたをや。							
問五	皇帝としての自身の言動の重みを自覚して、飢えやのどの渴きという一時の欲求に駆られ、臣下への負担や罰を与えてしまわぬように、臣下を慮ると共に、大局的に物事を判断する点。							

(参考文字数)

(51字)

(80字)

(83字)